

第5回 JASRAC 著作権ゼミナール

講演: 高校生が作詞家になった

講師: もず 唱平 氏

作詞家

皆さん、お早うございます。只今、紹介して頂きました、もず唱平です。歌作りを仕事にしております。そのご縁をもちまして、JASRAC(社)日本音楽著作権協会の理事の末席を穢(けが)しておりまして、本日の音楽著作権の研究会の皮切り役を仰せ付けられました。

プログラムには基調講演となっておりますが、そんな仰々しいものではなく、我々の世界でいう前歌程度に考えて下さい。

今日のテーマであります、音楽著作権はとても重いもので、社会的位置付けを等閑(なおよざり)に出来ないものであることを十分理解して頂きたいと思っています。

音楽著作権は知的財産の一つで文化活動の重要な支え役であると同時に、守らねばならないモラルであり、同時に守られる権利でもあるといえます。

この権利は我が国では生まれながらに付与(ふよ)されていますから、感性豊かな青春世代を啓発して歌作りに多いに挑戦して欲しいとかねてから考えておりました。

しかしながら今日の日本では、競争原理があらゆるところで発動され“感性”が重要視されていない、そんな風に思えます。私自身が感性を要求される歌作りについて学校で習ったことはありません。

学力とは記憶力か？と思えるほどで、今や出来がいい子とは受験能力に優れた子のみを指すがごときですね。たまたま私は十代の後半に師匠(喜志邦三)に恵まれ、二十代で作詞家デビューをすることが出来ました。感性を認めてくれる人に出会えたからです。

歌作りについては芸術系の大学にも作詞を勉強する機会がないように思えます。十代、とり分け高校時代に歌作りのチャンスがあったらいいのに、受験勉強に全ての時間をとられるのではなく、青春期の豊かな感性を活かしてやる事が出来れば、青少年の犯罪も少しは減るのではないかと、そんなことを考えることがあります。

そんな私のところに旧知の女子高の学園長がお見えになりました。八年前のことです。もともと航空会社に勤めておられたのですが、学園の理事長であったお父さんが急逝(きゅうせい)され、後継者候補として学園に迎えられました。

重山香苗さんと申しますが・・・その時、つまり教師になって大変驚いたとおっしゃる。民間の会社と物の考え方が違う。一般にいう進学校ではありませんので出来のいい子が溢れている訳ではないのですが、面白い個性をもった娘がいっぱいいる。この娘たちはどう評価されているのだろうか？ 学力という物差しで計れない個性、感性から生み出される能力をどう評価してやったらいいのだろうか？ どのばしてやったらいいのだろうか？ みんなとてもアクティブだ！。

生徒に聞いてみたそうです。『あなたは何がしたいの？』『何が出来るの？』。そうすると『ギター弾きたい』『ピアノをやってる』『駅前広場で踊ってる』『カラオケに行ってる』と即座に返事があった。

学校の授業に関係ないことばかり。しかし、とても意欲的。この意欲を活かせないか？

やりたいことをやらして潜在能力を伸ばしてやるのも教育。気に染らぬことを押しつけ、記憶データを増やし、受験技術を身につけさすだけが学力ではないだろうと考えられたよ

うですね。

先の間答で明らかなように、生徒たちのやりたいことは当面音楽に関わることが多い。『銘々が思い思いのことをやるだけではなく、みんなで出来ることも考えてみたら・・・』と水を向けると『ミュージカルをやりたい』なんて声が挙がったそうです。

そんな生徒たちの声を集約し、アクティブ・アート・コースが出来た。無論音楽系だけではないのですが、楽器を揃え、練習室を作り、講師も採用した。そのうちミュージカルにも挑戦させるとなると歌作りの手ほどきも必要になる。

さて、適当な人材は？　そこで私を思い出してくれたんですね。

申越しを引受けるについて学園長とはいろいろ遣り取りをしました。作詞法を教えることは出来る、しかしこの際、大事なことは教育的側面。感性を啓発してやること。問題を抱えているであろう青春群像に歌作りがどんな力になれるのか？を検討せねば・・・と話し合っただけで私の授業のタイトルを『自分史から自分詞へ』とすることに決めました。相手は**16**才で、私の孫世代です。**16**才にも来し方があるし、自分を取りまく人間との関係にも様々な想いがあるに違いない。つまり彼女たちには彼女たちなりの人生がある。その人生からの様々な想いを誰かに伝えたい、特定の誰かでなくてもメッセージにして発信したい。それを歌の形にする方法を教えようというのが主旨です。

教室での私の第一声は『みんなに本当のことを書いて欲しい。原稿用紙一枚で結構。つまり自分史だね。それを次に歌の詞、自分詞にしよう。私の歌作りは商品開発だから、レコード会社の注文で歌を作っているけど、みんなは誰かにこんなことを伝えたい。誰かでも、こんなことがあった、そのことをどう思うということを正直に書いて欲しい』というものでした。

加えて云ったものです。『ひとの目に触れることを前提に本当のことを書くのは中々むずかしい。抵抗感があるのが普通。そこで自分詞、歌の詞にする時、つまり作品化にあたってはフィクションという方法もある』

フィクションにすることは嘘でもいいということではないかという意見が当然あります。それには『事実と真実には相違がある。重要なのは真実。自分の書いたことが事実と人に知れることが厭なら、人ごとのように書いて結構。こんなことを誰かからきいた風にすればいい』と応える。

先に触れましたように自分史を原稿用紙あるいはレポート用紙一枚に書くようにと宿題を出しましたが、もう一つ注文をつけました。印字は認めない。メールも駄目。用具は問わないが、とに角自筆が条件。これは私の信仰みたいなものです。利便に頼り過ぎると生の声が届かない。まして人生の後輩には一文字一文字想いを込めて書いて欲しい。それが感性啓発に継がると信じているのです。

意外だったのは生徒たちの反応。私の授業は二クラスが一緒に聴くことになっていて都合**70**名。そのうちの何人がこの未知との遭遇、私の宿題に応じるのか？　まァ 半分もあれば御の字と思っていたのですが、何と**60**名余り、つまり九割が宿題を提出しました。驚い

たのは数ばかりではありません。内容に私の予想だにできなかったものがいくつもあったことです。

そのうちの一つを紹介します。タイトルは“包帯”。私が教えた作詞の手びきをよく理解していて、かなり歌の形になっている。フィクションではなく“自分史”。『みなさん、どんなストーリーかお分かりになりますか？』

たまたま会合で一緒になった仕事の先輩に同じことを訊いてみました。『うーん、包帯ね？ 大先輩の作品にあったように思う。従軍看護婦が登場する歌だったなァ』『そりゃ随分古い話ですね』と笑ったものです。

居合わせた私と同年代の同業にも訊いてみましたが、誰ひとりこの歌の内容について言い当てる人間はいなかったのです。

実はリストカットの話なんです。自分を傷つけることによってしか、生きているという実感を持っていない不安感が書かれていました。こんなことは極々まれなこと、めったにないことかという、そうではなく、後に知ったことですが、行為には至らないまでも、その気持ちが分かる、そんな気になったという娘が何人もいました。

この“包帯”の作者はこれまで成績優秀といわれる子供でなかったということですが、作品の一行目をみて驚きました。『傷口が治ったのに包帯をとるクセが直らない』。説明の要もないと思いますが、位相の異なる事象を一つの言葉に掛けている訳ですね。この発想、この感性を教育はどう評価するのでしょうか？

“消しゴム”という歌を書いた娘がいます。消しゴム自身はJポップスにも登場していたと思いますが歌に込められた想いに唸りましたね。自分は消しゴムで家族や友人たちの悲しみをゴシゴシ、このオノマトペが何度も効果的に使われるのですが・・・ゴシゴシ消してまわる。消しゴムですからその度毎に身が細る、遂には無くなってしまうのです。この詞をみて私は悩みました。どう考えたらいいのだろうか？

勿論、書き手の人となりは知っている訳ですから・・・仏心とでもいうべきでしょうか？人は生まれながらに他人を慮（おもんば）かる心、優しい心があるんだなァ、と救われた気持ちにさせられたものです。それにしても哀しい話じゃないですか。世の中が悪いから・・・では片付けられない問題作だと思っています。

もう一つ紹介しましょう。“みの虫”という歌。一見童謡のような歌のようにみえる。隣りのみの虫に挨拶に行こうと思うけど、みのから首を出したらまだ冷たい風が吹いていて、思わず首をすっ込める。何度かそんなことを繰り返し、ようやく春の陽差しを感じ、隣りのみの虫を訪れるというストーリーなんですね。

少ししかありませんが、経験則から『この娘は他人とのコミュニケーションをとるのが下手な娘じゃないですか？ 自閉症ぎみ？』と担任に聞いてみる。『そのようです』ということでした。

こんな“自分史”を“自分詞”に置き換え、それに芸術系大学卒業の講師がメロディーをつけてやる訳です。中には自分でメロディーをつけたり、友達同士で曲付けをしたりす

る生徒もいます。そんな作品がこの女子高にはもう二、三百出来ています。

これらが毎年、学園祭で何曲か発表されます。今、紹介しました歌は全部発表されたものです。先ほどの“包帯”は作詞家自身がステージで歌いました。その時、体育館に集まった全校生がスタンディング・オベーションでやんやの喝采。感動ものでしたね。

感動と云えば恥しい感動もありましたね。指導者としてステージに呼び上げられる。と、一番前列に見覚えのある生徒の一団が陣取っていて、私の登場に『セイノー』と声を掛け合い『唱平！』と黄色い大声を挙げた。アイドルスター並みの扱い。感動しましたね、この体験はそうそうあるものではないでしょうから…。

この授業が八年目に入ると申しましたが、初年度から出来のいゝもの多くて、先に紹介しました“包帯”や“消しゴム”それに“みの虫”などを、レコード会社にいくつかプレゼンテーションしてみましたが。流石に『うーん』と唸ってはくれるものの、誰かに歌わせようかという話にはなりません。

その中で“メール”という作品だけがレコード会社のディレクターの耳にとまり、カップリング曲ではありましたが、一般商品としてリリースされました。航空会社も機内放送のメニューに採用してくれて、作詞をした **16** 才、その時は一年の経過があって **17** 才でしたが、音楽出版社と著作権譲渡契約を結び、目出度く J A S R A C の信託者になっています。

今日のテーマであります、音楽著作権を守って貰わねばならない立場になった訳です。彼女は音楽著作権料専用の預金通帳を作りましたから、金額の多寡（たか）に関係なく著作権の大事さを身をもっていま体験している筈。無論、守らねばならないものであることも深く認識しているものと思います。

彼女は無事に卒業してくれるだろうか？と、入学当初心配させたこともある生徒でしたが卒業どころか、その上の短大に入学。いま立派な社会人となってくれました。

勢いを得てということでしょうか、その彼女は“卒業の歌”まで作り、それが今もこの堺女子高等学校では歌い続けられています。

これまた、職業人の私にはとても書けない歌で、大意をご紹介しますと、次のようなこととなります。三年間、同じ学校で一緒に勉強し、遊びました。いい友達が沢山出来た。しかし、分かり合えずしまいの人もいる……。こゝんところ、私には書けませんね。

“卒業の歌”ということになると別れを惜しむ、先生を含め一緒に過ごして出来た絆を大事にしたい、といったことが定番のテーマになろうかと思うのですが、彼女は美辞麗句を並べるのではなく、真実を書いたのです。それだけではありません。終章に到り『それでも同じ学校で勉強した友達だから、何処かで出逢ったら声を掛け合おう』と記したのです。

この“卒業の歌”は毎年替えようということになっていたのですが、これを越えられるものが出来ないとということで、ずっと歌い継がれています。

今のところ音楽著作権料は発生していませんがこれからも歌われると思われそうですね。

今年も、女子高で『自分史から自分詞へ』の授業が始まりました。そこでこんなことを冒頭（ぼうとう）にしゃべりました。『私の望むもの、それは感性。たとえば月の輝きは？と質問して“あれは太陽の反射光”と答える人がいたら百点をあげる。しかし、気にいらない。泣いているように光ることがあったり、淋しそうに見えることもあるといった、感想を聞きたいものだ』と。

人と人との関係性だけではなく、自然にどう感応するかという感性が尊ばれる世の中であって欲しいと思います。そのために私たちの後継世代が競争原理の渦に巻き込まれて感性を磨耗（まもう）させてしまわないことを祈るばかりです。

勿論、感性の産物、音楽コンテンツを支える音楽著作権が疎（おろそ）かにされるようでは人間圏に進歩はありません。今日は大阪市の教育長もお見えです。我々の後継世代の感性教育に一層力を注いで頂くことをお願いして、私の講演を終らせて頂きます。

ご清聴有難うございました。

※この“自分史から自分詞へ”の授業は大阪府では『大阪府私立学校先導的モデル支援事業』に文科省では『教育改革推進モデル事業』に採択された。